

シモーヌ・ヴェイユの天才論

——「人格と聖なるもの」における古典的美学の揺さぶり

日下 雅貴 (北海道大学)

美や芸術について多くの言葉を遺したフランスの思想家シモーヌ・ヴェイユに関して、その「美学」を再構成する試みがとりわけ1990年代以降、断続的に行われている。そこで主要な関心となってきたのは、ヴェイユがプラトンの美の思想、カントの美学をいかに受け継いだかという問題だった。大局的に見るなら、これまでヴェイユの美学は古典的な美学とのつながりを強調する仕方でも論じられ、結果として、美の自明性に立脚しない現代の美学とは相容れないものであると印象付けられてきたと言える。

しかしながらヴェイユは単なる美の「古典主義者」なのだろうか。本発表では第二次世界大戦中に書かれた晩年の論考「人格と聖なるもの」における芸術創造の理論(=天才論)の分析を通して、ヴェイユの美学のなかに古典的美学(特にカント)からずれる要素、また現代の美学(特にアドルノ)に接近する要素のあることを明らかにする。その際、その天才論において「美」の自明性を疑う振る舞いが見られることを併せて確認し、「古典」という枠に収まらないヴェイユの美学の多面的な姿を現し出すことを目指す。

「人格と聖なるもの」の天才論は、創造の対象、創造過程における「美」の位置付けという二点に関して特徴的である。本論考でヴェイユは同時代に求められる芸術創造の唯一の対象として「不幸」における「沈黙の叫び」を指示する。それは具体的には「なぜわたしに悪が為されるのか」という非人称(impersonnel)の「叫び」であるが、ヴェイユは、この非人称的で非感覚的な「叫び」を人格・感覚の領域にもたらす存在論的役割を芸術や美に与える。そして非感覚的なものの感覚化というこのパラドクスを具体的に解消する能力が「天才」と名付けられるのである。

「天才」は「正義と愛の精神」とも言い換えられ、「美」は、この能力によって「沈黙の叫び」が作品という客観的形態を獲得する際に「恵み」としてもたらされる。ここで発表者は「人間の生み出すものは、それが正義と真理の精神によって抑制されているなら、美の閃光を帯びている」というヴェイユの言葉遣いに注目し、「美」が創造の過程から注意深く排除されていることを指摘する。「美」は形而上学的原理として導入されていながら、同時に天へと押し除けられているのであり、発表者はここにヴェイユの「美」に対する独特の振る舞いを見出す。

結論では、本論考でヴェイユが芸術創造の唯一の対象とした不幸を「関心なき苦しみ」として捉え直し、その天才論が感性のレベルにおいて、カントの「関心なき適意」に関する議論を短調に変奏するかたちで出発していること、また、「苦しみ」を美学の根底に据える点でアドルノ美学に接近していることを簡単に指摘する。加えて「美」に対する前述の振る舞いが、美を無条件に肯定することを避け、美と倫理を共存させるための苦渋の策であったことを明らかにする。